「大胆に神に近づく」

エペソ人への手紙３：１２

January.15.2023

エペソ人への手紙３：１２（パワポ）

Preface

今日からまたエペソ人への手紙に戻り、御言葉を分かち合っていきたいと思っております。

今朝は、今読みましたエペソ書３：１２の「私たちがキリストにあって、大胆に神に近づくことが出来るようになった」ということについて考えて行きたいと思います。

聖書に依りますと、人は元々、天地万物をお造りになった神様に大胆に近づくもなにも、そんな大げさに思えるような表現を使う必要なんてない程に、神に近しい存在でありました。

どれほど近しい存在であったかと言いますと、創世記では、「神が人の鼻にいのちの息を吹き込んで、初めて人は生きるものとなった」と、人間の生死を左右する呼吸の源が神によるものだという記述をもって、人と神との元々あった密接な関係を表しています。

「関係」という言葉を使いますと、神と人との間に何か一定の距離が空いているかのような印象を与えてしまいますが、呼吸をしているのかしていないのか、呼吸が出来ているのか出来ていないのかで人が生きているのか生きていないのかを判断するほどに、呼吸は人と一体にあるものです。

つまり、「鼻に吹き込まれた神のいのちの息によって、人は生きるものとなった」と言う御言葉は、「人と神は元々、『関係』というような言葉で表現するような特定の距離や、または物理的距離のようなものがある間柄ではなく、一体であった」ということを言い表している言葉になります。

「人は元々、神と一つであり、いつも神と共にいた存在であった」ということです。

Part One

創世記２：７（パワポ）

人は、神にいのちの息を吹き込んで頂き、初めて生きるものとなりました。

他の動植物には、この神のいのちの息が吹き込まれたという記述は聖書にはなく、人にのみ、いのちの息が吹き込まれたと書かれています。

即ち、神との繋がりを失っては、本当の意味で人は生きたものとはならないという、どの被造物とも違う人間という存在の特別性、格別性を教えてくれているわけです。

また、ここで言う「生きるものとなった」の「生きる」とは、限りある、寿命のある命ではなく、寿命の無いいのちのことを意味します。
人は本来、吹き込まれた神のいのちの息によって、世々限りなく生きる霊的に満たされた充足された存在でした。

ところが、創世記６章を見ますと、人の悪が増大し、人の心に図ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった神様が、「人は神のいのちの息を吹き込まれた霊的存在であったにも関わらず、肉に過ぎないものになってしまった。だから、わたしの霊が彼らに永久にとどまることはなく、彼らの齢は長くても１２０歳になる」という宣言をなさり、人は、神の霊を失ってしまった霊的に欠乏した、または紛失した存在となってしまいました。

正に、神のいのちの息を失い、まことのいのちを生きられない者へとなってしまったわけです。
神の霊が離れるという神との断絶が、人を死に行く者へと変えてしまいました。
どんなに肉体的な呼吸を一時的に保つことが出来たとしても、「神の霊がその人のうちに無いならば、死んだも同然の存在が人である」というのが、聖書が私たちに教えてくれる問題を抱えた人間の姿です。

もちろん、神の霊がその人の内に無くても、一定期間肉体的な呼吸をすることは許されていますから、すぐに死んでしまうということはありません。
でもやがて、その肉体的な呼吸も止み、遂には死を迎えて、神から離れている、または神と繋がっていない命は、命ではなく死であるということをその身をもって体験することとなります。

枝は木から切り取られた時点で、実質もう死んだことになりますが、しばらくは葉も青々とし、花房もそのまま残り、時には蕾が花を咲かせることもあるでしょう。
がしかし、時間の経過とともに、木に繋がっていないという症状がその枝に表れ、やがて朽ちて枯れて無くなっていきます。
枝が木に繋がっていないがために、本当の呼吸が途切れてしまったからですね。

人も同じように、その内に神の霊が共にいなければ、死んだも同然だという深刻な霊的問題について聖書は教えてくれます。
神の霊がその内にいて下さらなければ、どんなに一時的に花を咲かせたとしても、今は青々と葉が茂っていたとしても、これから咲かせようとする蕾を持っていたとしても、どこかいつも息苦しさを感じながら生き死んで行ってしまいます。
人には、神によってしか満たされ得ない空間があるということです。

Part Two

私自身、初めてイエス・キリストを信じ、私をお造りになった唯一まことの創造者なる父なる神を知り、神の霊が私の内にいて下さるようになるということを知ってから、それまで私の内に神の霊がおられないということゆえに息苦しかったことが当たり前のこと過ぎて、息苦しさにも気付かずに生きいていた、または、「本当は息苦しいんだけれども、皆が経験している当たり前の息苦しさなんだ」と半ば諦めて、生き死んでいたという霊的事実に気付かされました。

私たちの周りには、知らずに霊的息苦しさに喘いでいる人たちが溢れていることでしょう。

私の好きな聖書箇所でエゼキエル書４７章の御言葉があるのですが、そこには、神の御座から流れ出てくる豊かな水を受けて魚が生き生きと泳ぎ、またその水ゆえにすべてのものが生き、果樹が生長し、その葉も枯れず、実も絶えることがなく、命あるものが瑞々しく躍動している様子の幻が記録されています。

私は小さい頃から水がとても好きで、川でも湖でも海でもプールでも、目の前に水がありますとすぐ入りたくなってしまうのですが、子供の頃、一緒に居た家族みんなが「あ、死んだかもしれない！」と思うほどの川の激流に呑まれて流されたことがありました。

でも、トラウマ等になることも一切なく、今でも川や湖海、ちょっと汚いこの前の桜川や霞ヶ浦でさえも入ってしまうほどに水が好きなのですが、２６年前イエス・キリストに出会った時、正に水を得た魚のように、魂が死への息苦しさから解放されたことを体験しました。

そして今も、「いのちの息を改めて吹き込んで頂いた。その瑞々しいいのちが、キリストの霊とともに私の内にある」という信仰による確信が、私という人を神の元へと大胆に近づかせていきます。

人は、神の霊を、キリストの霊を、神のいのちの息を与えられることによって、再び生きるものへと変えられます。

使徒の働き２章に、五旬節の日に聖霊が激しい風と共に弟子たちに下り、満たし、霊的に死んでいたような弟子たちを生き返らせ、奮い立たせ、本当に真に大切なもののために生き、そのために命を懸けることの出来る者へと変えていったあのペンテコステの出来事は、創世記２：７の新たな再現だと、創世記６章の回復だというふうに、私は考えています。

なぜならば、ヨハネの福音書２０：２２に書いてありますが、復活されたイエス様が、実際に弟子たちに息を吹きかけながら、「聖霊を受けなさい」と仰ったからです。

Part Three

キリスト教信仰においていつもその核心となる話題、主題は「罪」ですが、なぜキリスト教信仰の主題が、救いや祝福や奇跡などではなく、「罪」が主題となるのか？
それは、いつでもキリスト教信仰の目的は、神との一体、神と一つであること、神との和解や交わりのようなものであるからです。

ここまで見てきましたように、人は、元々神と一体であり、一つであり、和解も何も、神と和解しなければならない関係になんか無かったけれども、和解しなければならない深刻な関係断絶、絶縁、無縁になってしまったことが最大最悪の結果であり、その結果をもたらしたのが私たちの内に存在している罪、悪です。

この神との絶縁関係は、神様が元々意図しておられた人間の本来あるべき姿ではありません。
だからいつも、キリスト教の核となる内容は、神の意図から外れてしまった原因である罪を打ち破ることとなるわけです。
そして、元々神様が意図しておられたように、神様がお造りになった神の子どもたち、人間一人一人との完全な交わりを今一度回復させ、成就させ、永遠の御国で、永遠にその交わりを、永遠に神との一体を保ち続ける、守り続けるんです。
永遠という言葉は、死後にそれが始まるという意味ではなく、今という時もその永遠に含まれていますし、今から永遠に神との一体を保ち続けるんです。

そのために、必要不可欠な罪の打ち破りと神のいのちの息が吹き込まれるという回復が、イエス・キリストであり、イエス・キリストの十字架の贖いであり、キリストの霊である聖霊が私たちの内に今一度住んでくださるということです。
だから私たちは、神との交わりを、神と一つになるという祝福を回復させて頂いたならば、意志をもってキリストにとどまり続けるんです。

一度失ってしまった神との交わりを、神と一つになるという祝福を、私たちはキリストにあって回復させていただきました。

このキリストにあってということが、どれだけ物凄いことで、どれだけ感謝で、どれだけ重大なことで、どれだけ私たちを大胆に神に近づける者としてくれたのかということを、旧約聖書の登場人物たち、ただの登場人物ではなく、重要な登場人物たち、神の言葉を頂き宣べ伝える預言者だったり、いけにえを献げる行為や礼拝を導く祭司だったり、神の選びの民だと言われたイスラエル民族だったりの姿を見ますと、良く分かります。

彼らも、私たちと同じく天地万物をお造りになった唯一の神様を信じている者たちですが、その神の御前に出るということが、どれだけ恐ろしいことで、どれだけ危ないことなのかを身の毛もよだつ程に良く分かっていました。

と言いますのも、ここまで見てきましたように、神との断絶関係にあるということは、それは死を意味することであり、神の霊の代わりに悪の霊に従っていることであり、神の子どもではなく悪魔の子どもになっていることであり、聖なるお方とは違う汚れた者、罪深き者、心の鈍い者、無価値な思いに引き渡された者となってしまったということです。

それゆえに、聖なる神の前に出て行くだけでも、死んでしまう存在となってしまいました。
聖なるお方の前において私たちが表現できる唯一の表現は、死しかない者となってしまったわけです。
神のご臨在に近づくだけでも死んでしまう者となったのが、神の霊を取られた私たち罪人の姿です。

だから実際に、旧約聖書のイスラエルの民などには、神が特別にご自分のお姿を現すためにシナイ山にご臨在くださった時、重大な注意事項を天から発布して下さいました。

出エジプト記１９：１６－２１（パワポ）

さらに、

出エジプト記３３：２０（パワポ）

Part Four

人は、神の元に近づくだけで死んでしまう存在へと没落してしまいました。
それゆえに、もし、人が神のご臨在の前に出ていく時には、最善の注意を払い、揺るぐことのない信仰を持って、神から定められた言葉を守りつつ、神の前に出て行くために必要な儀礼を漏らすことなく執り行い、それでもなお、神の御前に出て行くために守るべきことは守ったけれども、死んでしまう可能性も万が一、いや大いにあるという恐れを持って、神の御前へと出て行きました。

旧約聖書には、神様が特別にご臨在下さる幕屋というものと、神の宮というものがありましたが、その幕屋や神の宮の中には至聖所という神の言葉が刻まれた２枚の石板が保管され、神が特別にご臨在下さるところがありましたが、その至聖所に入ることが出来たのは、祭司の中でも大祭司のみで、その大祭司でも１年に一回しか入ることが許されず、細かい儀礼を漏らすことなく守り、入る時には必ず、着ている装束の裾周りに鈴をつけて入って行かなければなりませんでした。

と言いますのも、大祭司が至聖所に入って動いている間は、足元のその鈴が鳴り続け、鈴の音が鳴らなくなった、即ち動きがない＝死んでしまった、神の前に

あって何か間違いがあったために死んでしまったということを、鈴の音が鳴らなくなったということをもって確認するためです。
　もしも大祭司が死んでしまったからと言って、すぐにその遺体を引き取りに至聖所に入ることは出来ません。
　なぜならば、死聖所に入ることができるのは、一年に一回、選ばれた大祭司が、定められた儀礼を漏らすことなく行った時のみだからです。
　じゃあ、どのように、死んだ大祭司の遺体を回収するのか？
　大祭司に堅く結ばれていて、至聖所の外に出ている紐のようなものを掴んで引っ張って、至聖所からその遺体を引き出すしかありませんでした。
　そして実際に、神の前にあって相応しくない形で幕屋に入って、死んでしまった者までいました。

レビ記１６：１－２（パワポ）

　イスラエル民族のリーダーであったモーセの二人の甥っ子は、神の前に不敵にも、大胆にも出て行き、死んでしまいました。

　この大事故大事件の７００年後に活動した預言者イザヤは、この７００年前の事故のことを良く知っていたのでしょう。
　幻の内に神様に会い、神様と言葉を交わすのですが、「神のことを見てしまった」と震えおののき、「ああ、私はこのままでは死んでしまう」と嘆く場面がイザヤ書に記されています。

イザヤ書６：１－５（パワポ）

　預言者イザヤは、以前もお話ししたことがありましたが、聖書６６巻になぞらえて、小さな聖書と言われる６６章からなる神の言葉を記したイザヤ書を書き残した大預言者でありました。
　そんなイザヤでさえも、「私は神を見てしまった。神の前にあって汚れでしかないこの私は、滅びてしまう」と怯えました。

　これが、いのちの息を失い、神の霊がとどまることのなくなってしまった罪人だと言われる人間の姿です。
　大胆どころか、むやみやたらに、神の前に出て行くことなんか当然出来ず、そんなことを考える由もない存在に落ちぶれてしまったのが、罪人となった人類、私たち全ての姿です。
　泣けてきませんか？

Part Five

　なのに、私たちは、あまりにも簡単に神の御前に出て行くことが出来るようになりました。

１週間全く聖書も読まず、祈ることもなく、賛美を献げるどころか終日聞いている音楽は、世の中のラブソング、ポップミュージック、ロック、ヘビメタ、クラシック、フォルクローレ、民謡演歌、なんでもござれだけれども、１秒も賛美は聞かず、賛美も歌わず、人を愛すどころか憎み裁き、神よりもお金を愛し、自分のプライドを立てることに熱心で、人のために自分が存在するのではなく、人が自分の都合のために存在するような生き方をしながら、聖霊に満たされるよりも酒に酔うことを喜びとし、礼拝を献げる主日に対する特別な思いもなく、神に献げる献金も持たず、「まあ今日も楽しけりゃいいや」ぐらいの気持ちで日曜日の礼拝に出席しても、私たち、まず死にません。

使徒の働き５章のアナニアとサッピラの例がありますから、一概に「絶対に死にません」とは言い切れませんが、まあ、よっぽど特別な事、神様の御思いがない限り、むやみやたらに神の前に大胆に出て行ったとしても、死ぬことはなくなりました。

なぜか？
イエス・キリストのおかげです。
イエス・キリストが、神と絶縁関係に陥らせた私たちの罪のために十字架に架かられ、息を引き取られたその瞬間、神の宮の奥にある大祭司だけが１年に１回入ることの出来るあの至聖所を仕切る幕が、上から真っ二つに、神のみこころとともに天からの不思議な力によって引き裂かれました。

「もうこれ以上、人と神とは、遠い距離のある、乗り越えることも飛び越えることも出来ない、その声をほんの少しでも聞くだけでも死んでしまうようなそんな間柄ではなくなるようにした！」という神の愛の声の具現化が、神殿の幕が真っ二つに裂けたということが意味していることであり、私たち人間と神との間を引き裂いた罪を打ち破ったことの表われです。

ヘブル人への手紙１０：１９－２５（パワポ）
ヘブル人への手紙４：１６（パワポ）

私たちは、イエス・キリストによって神の御前に大胆に近づくことが出来る者とされた、大胆な存在です。

だからますます励もうではありませんか。
愛することを、赦すことを、受け入れることを、互いに人を自分よりも優れた者と思うことを、主イエスを伝えることを。
そして、私たちの戦う相手は人ではなく、サタンであることを、悪魔であることを、私たちの内になお居座り続けようと躍起になっている罪だということをしっかりと見据えて、神の御言葉にとどまろうではありませんか。
祈ろうではありませんか。

神を礼拝することを第一にしようではありませんか。
人を祝福するものであろうではありませんか。

Part Six

今年の主題聖句は、神とヤコブの格闘の箇所とイエス・キリストにとどまり続ける聖書箇所ですが、私たちはその気にさえなれば、いつでもどこでもと言いますとちょっと言い過ぎかもしれませんが、ヤコブ以上に大胆に神との格闘に臨むことの出来る恵みの時代に生きています。

では、私たちにとっての神との格闘とは何なのか？
英語の聖書を見ますと、創世記３２書の「神との格闘」という言葉が、「神とレスリングする」と訳されています。
神とレスリングするんです。
汗まみれになって、怪我することもあって、傷つくこともあって、成長することもあって、正に、私たちが日々生きている人生そのものが、神との格闘の場であることを示唆しているように思えます。

神が導こうとしておられることと、私が望むことをぶつからせながら、結局は神の導きが勝ち、その導きが私の思いよりも遥かに勝っていたという私が折れることを経験する神とレスリングする場が、私たちが生かされている人生でもあるでしょう。

また、「レスリングする」という言葉が、他の聖書箇所にも使われているのですが、そのうちの一つコロサイ書を見てみたいと思います。

コロサイ人への手紙４：１２（パワポ）

「祈りに励んでいます」の「励んでいます」が、英語の聖書では、「レスリング」と訳されています。
つまり、祈りこそ　神とのレスリングです。

そして、この神との祈りであるレスリングには必ずと言っていい程ついて来るものがありますが、それは聖書の言葉であり、神の御言葉に聞くということです。

イエス様が、「あなたがたは聞き方に注意しなさい」と仰ったことがありますが、私たちは聖書の言葉に聞く時、または読む時、その聞き方に注意しなければなりません。
私たちが聖書を読む時いつも感じるのが難しい、または分かりにくいということですが、その根本的な原因は、聖書が難しいということよりも、私たちは私たちの要求をもって聖書を読もうとしていることです。

そもそも聖書は神の言葉というぐらいですから、神から私たちへの要求が書いてあるものであって、私たちの欲望という要求に答えるために書かれた書物が聖書ではありません。

だから、聖書を読む時、または聞く時には、その聞き方に注意しながら聞くでんす。
私の思っていること、私の願っていること、私の好きな、私が喜びそうな言葉を私が受け止めたいように受け止め解釈するのではなく、「神様が何を私に要求しておられるのだろう」という面持ちで御言葉に聞くのです。

すると、そこで当然のようにレスリングが生じます。
ヤコブの要求と神様の要求が食い違ってレスリングとなったように、私たちも神の言葉と私たちの要求がぶつかるとレスリングになります。
神の言葉に注意深く聞こうとすると、自然とそれは祈りとなり、レスリングになります。

Conclusion

だから思う存分聖書を開いて、大胆に神の御前に近づいて行き、自分の要求と神の要求をぶつかり合わせるレスリングをして下さい。
すると神様がいつか必ずや、もものつがいを外してくださるという痛みの伴う恵みに与らせてくださることでしょう。
なぜ痛みが伴うのに恵みなのかと言いますと、神様の要求は、究極的にいつも私たちのことを思ってのことだからです。

祈りをもって、神の言葉に注意して聞くことをもって、説得され、納得させられ、その御前に降参させられることほど幸いなこともなく、自由なこともありません。

私たちは、大胆に神に近づくことが許された者ですから、大胆に神の御言葉の前に出て行き、思う存分神とのレスリングに励んでください。
励もうではありませんか。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ３：１２